

魔法先生ネギま！ アニメ版アナーザー最終話

原案 シオン||ソルト  
著 水野夢絵





# 目次

1. Nemo nisi mors. ....	6
2. Errare humanum est. ....	9
3. Factum est illud, fieri infectum non potest. ....	14
4. Pastor quum traheret ....	19
5. Videre est credere. ....	22
6. Την μὲν ἄτην, εἶπε ἡμῖν. ....	26
7. O praeclarum custodem ovium lupum! ....	30
8. Che a compagne a padrone ....	34
9. Mane, Tekel, Fares. ....	39
10. Dum inter homines sumus, colamus humanitatem. ....	43
11. 無惡善 ....	46
12. Pede claudio. ....	50
13. Res firma mitescere nescit. ....	56
14. Frailty, thy name is woman. ....	60
15. افتح يا سمسم! ....	66
16. Et tu Brute! ....	72
17. Vive hodie. ....	77
注釈 ....	78
後書き ....	90
解説 ....	92

*XXVI. Averruncus*

## 1. Nemo nisi mors.

静まりかえった林の中に、ただ明日菜の嗚咽だけが聞こえている。『サウンザンドマスター』ナギ・スプリングフィールドは、魔剣士と共に空間の穴へと消えた。また私のために人が死んだ——残された杖の前で、明日菜はただ泣く事しかできない。

「どうしたの、アスナちゃん！」

ナギが消えてから遅れる事数十秒、魔力の発露と明日菜の悲鳴を聞きつけてネギが戻って来た。そこにあつたのは泣き伏す明日菜、地面に付き刺さったナギの杖、そして大量の血痕。ネギはすぐに悟った——昨日のように悪魔が現れ、ナギと明日菜を襲ったのだと。

「そんな……」

ついさっきまでここに居た憧れの父を失い、ネギは呆然としていた。父の手助けとなるばかりかそこに居る事すらできなかつた……自分は一体、何のためにここに来たのだ、と。

「あんたも、どっか行つた方が、良いよ……私と一緒に居ると、あんたも死んじゃうから……」

明日菜は泣きながら、ネギにそう言い放つ。昨日楽しく遊んだ女の子からそのような残酷な言葉が飛び出すのを聞き、逆にネギは冷静さを取り戻して行くのを自分で感じた。

（そうだ、僕はアスナちゃん……アスナさんを助けるためにここへ来たんだ。それに父さんは

生きている、今から三年後に僕自身が会うんだから。父さんはアスナちゃんを一人にしたりしない。僕が居るとわかっているから、僕にアスナちゃんを託して、悪魔を全力でここから遠ざけたんだ……！)

「行きませんよ。どこにも行きません。ナギさんが戻って来るまで、僕がアスナちゃんを守ります。アスナちゃんを、アスナさんを守ると、そう誓ったんですから。僕はそのためにここへ来たんですから」

アスナの頭を撫でながら、ネギははっきりとそう告げた。明日菜は驚いた表情で、ネギを見上げる。年下なのにませた言動を見せていたさっきまでとは異なり、そこにはネギへの微かな信頼が見て取れた。

「素晴らしい決意です、ネギ君。けれど」

後ろから声が聞こえ、ネギははっと振り向いた。そこにはナギより少し歳上、30歳過ぎくらいに見える男が立っていた。黒い服、やや跳ねた髪、細い眼鏡、そして刀を携えている。名前を呼ばれて驚いたネギだったが、男の背後を見て更に驚いた。

「やつと見付けろつスよ、兄貴！」

「ネギ先生、御無事で何よりです」

「これで全員揃ったでござるな」

「けれど、他の君の生徒達の事を忘れて居ないかな？」  
そこには2-Aの生徒三十人と、カモミールが揃っていた。



## 2. Errare humanum est.

「ふ……そうだな、お前達にも話しておいた方が良いだろう。私やネギ・スプリングフィールの正体、そして魔法の事を」

時は少し遡る。ネギが発動させたタイムマシンの暴走に巻き込まれた<sup>2-A</sup>の生徒達は、エヴァンジェリンや茶々丸と話しているカモミールに気が付いた事から、ネギが魔法使いであると聞かされることになった。王子だとか大統領の息子だとかパートタイマー好きだとか様々な噂があつたが、真実を初めて聞かされた面々は流石に驚きを隠せず、また大騒ぎである。

「じゃ、ネギ君、本当に魔法使いなの？」

「いやー、まあ、そういう事なんすけどね……それより嬢ちゃん、そろそろ放して下さいよ」  
「あ、ごめん」

エヴァンジェリンの話が続く間、ずっとまき絵に握られていたカモミールは、ややうんざりした表情で答える。

「でもそんな事言われたって、実感できないし、信じられないよ。目の前で魔法ってゆーのを見せてらればともかくさー」 ↑ □ポットや幽霊が生徒やってる時点でおかしいっつーの

「『九年前のドイツに居る』っていう状況が充分魔法だと思っけど？」 ↑ 納得するんじゃねえ

「ドイツはさておいても、九年前かどうかはわかんないじゃん」 ↑ さておきなよ

「どこかで新聞でも買ってみようか？」 ↑ 珍しくまともな発想だな

「ドイツのお金、あるの？」 ↑ 結局抜けてるわけだ

沈黙してしまったのはチアリーディングの三人。

「ねー、誰かドイツのお金、持ってない？」

「あるわけないよー。日本円だって足りないのにー」

「私、いつもカードですから……」 ↑ プルジョアめ

「あ、いいんちょ。カードでも良いから」

「駄目ですわ。発行日が未来ですから、きっと不正扱いされてしまいますわ」

「うー……」

「小銭ならあるぞ、少しだがドイツマルクだ」 ↑ なんてそんなもん持ち歩いてるんだよ

名乗り出た真名が、手慣れた様子で新聞ボックスから一部買ってみせた。そこには確かに

『30. August 1994』と書かれている。トップ記事に『Russische Truppen Rückzug』と書かれているのを見た真名は、何故か微笑んでいた。

ちなみに、さつきから脇で頷いたり青筋立てたりと百面相しているのは、千雨である。

「エヴァちゃんも魔法使いなの？」

「そうだ。私は『吸血鬼の真祖』ハイ・デイトウキョウカ『闇の福音』ダーク・エヴァンジェルエヴァンジェリン、最強無敵の『悪の』

魔法使いさ！」

「自分で悪って言うか……」

「な、何か良く解んないけど偉そーだね……」

エヴァンジェリンの勿体ぶった名乗りに呆れる一同。そんな中、ファンタジーに詳しいハルナが気付いた。

「デイトウキョウカー、ってことは吸血鬼？」

「ふふ、いかにも！」

「うわ、それマジで凄いや、真祖の吸血鬼がクラスメイトだなんて！」 ↑ 喜ぶなよそんな事

「だめだめ、だから証拠あるの？ 牙見せてよ牙」

「い、いや、今は満月じゃないから……」

「駄目じゃん」

「でもロボットや幽霊も居るクラスだからねえ、吸血鬼が増えても不思議じゃないけど」 ↑  
だから納得するなっつーの！

「確かにエヴァンジェリンさんは、十五年前からずっと同じクラスに居ました。お話は本当の

「ことだと思えます」 ↑ 非常識が非常識を評するか

「さよちゃんは嘘つくような子やないよね……うーん、やっぱ本当かなあ」

「よし決まり、こいつはスクープだ！ 『ドイツ発、子供先生(10)の正体は魔法少年』！」

「ドイツ発って……」

「あー……っ!!」

肝腎のエヴァンジェリンをそっちのけにして脱線する一同の中、突然大声を上げて会話に割り込んで来たのは、まき絵。

「桜通りの吸血鬼！ あれってまさかエヴァちゃんだったの!？」

「悪いか？」

「『「悪いに決まってるでしょー……!!」』」

噛まれた事のある四人、裕奈・亜子・アキラ・まき絵が一齐に突っ込みを入れる。

「ふふん、あの時は面白かったぞ。お前達を操ってぼーやを襲わせたりしたしな」

「え？ 私、ネギ君襲っちゃったの？ きゃー♡」

「そこ！ 喜ぶとこじゃないでしょ！」

「そういうお前も一緒に襲っていたんだがな、大河内アキラ。嬉々としてぼーやを脱がせてたな」

「え……」（かああっ）

「だから『悪の』魔法使いなのさ！」

「『自慢すな!!』」

*Factum est illud, fieri infectum non potest.*

「エヴァンジェリンさん……もし貴女が、貴女の言うような大魔法使いなら……」  
それまで黙りこくっていた夕映が、エヴァンジェリンに声をかける。

「……アスナさんを、生き返らせる事はできないんですか？」

強い調子で放たれたこの言葉に、一同振り向いた。しかし嘆息するエヴァンジェリン。

「駄目だ。ぼーやにも言ったが、そんな魔法はない。魔法だろうが何だろうが、一度死んだ人間を生き返らせる事など不可能だ」

「そんな……それでは、ネギ先生は……」

下唇を噛みしめ肩を震わせる夕映。ネギの苦悩と、過去を変えてでも明日葉を助けようとした思い。悪魔にすら縋ろうとしていたネギを見ている夕映は、涙も流さんばかりになっていった。その姿を背後から見つめているのどかだったが、とても声を掛けられる状態ではなかった。

「で、私が、タイムマシンで過去に行て、あすなサンが死んだ理由を調べれば良いと言ったわけネ」

「……！　で、では、やっぱりアスナさんを、生き返らせられるかもしれないですね!？」  
「駄目だと言っているだろう!」

鈴音の言葉に、希望を得たかのように目を見開いて言う夕映。だがエヴァンジェリンは、さつきよりも激しく言い放つ。

「それは魔法ではできないとかいう以前の問題だ！ 過去を無かった事にするというのは、それ自体が摂理に反するんだ！ 魔法だろうが、科学だろうが、たとえタイムマシンだろうが、『神楽坂明日菜は二〇〇三年一月二二日に死んだ』という事実はもう起こった事、確定した事なんだ、変えられないんだよ！ ……そんな事ができるのなら、私がつくにやっつけているさ……」

再び沈黙してしまった一同。そんな中で刹那は、エヴァンジェリンの言葉の中にもネギと同じような苦悩を感じていた。戦う者として自分も一般人より「死」を身近に感じてはいるが、思えば吸血鬼として人より遥かに長い時間を生きて来たエヴァンジェリン、その間に一体何度人の死を目の当たりにしてきたのだろうか。彼女は自身が「死」から遠ざかった分、他人の「死」をより深く受け止めているのかもしれない。自分では殺しも辞さない「悪」のつもりでいても……エヴァンジェリンさんの仰る通りですわ。ネギ先生のお気持ちも良く解りますけど、もし九年前のアスナさんをどうにかしたとしても、私達の中にある事実、アスナさんを送ったという事実はもう変わらないんですから」

「それで、良いの？ あやか……貴女が一番悲しい筈なのに……」

「落ち込んでいる場合ではありませんもの。私達は、これからの事を考えなければ」

重苦しい沈黙の中、真つ先に我を取り戻したのはあやかだった。明日菜の事といい、ネギの事といい、三〇人の中でも一、二を争うほど心は揺れているだろうと誰もが認めている。しかし皆が混乱している時こそ落ち着いて、全員安全に元の時代に帰れるようまとめなければならぬ、それが委員長である自分に今できる唯一の事だと、そう彼女は決心していた。

「何をするにしても、まずはネギ坊主を探さなくてはネ。過去に来た全員が揃わないと戻れないし、それにタイムマシンはネギ坊主が持たままヨ」↑役に立たねーのな

「と言つても、ネギ君の居場所を知っている人なんているん？」

木乃香の問いに、誰も答える事ができない。

「ネギ先生は、ここに……」

「ネギ先生は、アスナさんに会うためにここへ来たです。アスナさんが昔ドイツでどこに居たか、誰か知ってる人はいないですか？」

おずおずと進み出たのどかの台詞を奪うようにして問いかけた夕映だったが、これにも沈黙が回答する。夕映も思い返して嘆息するしかない。

「そもそもアスナさんが、かつてドイツに居たと言う事自体が、初耳ですね……」

「高畑先生から教わつても英語ポロポロだもんねえ、外国に居たなんて信じられないよ」

「そう言えば確かに、小学の時、転校してきた時に、外国から来たって言われてたけど」

「まあ、外国育ちが必ずしも外国語に堪能とは限らないし……」



「所詮は我らが同志バカレッド、ドイツに居たところできつと何も身に付かなかたに違いないアルよ」

「あははー、それもそうだねー」 ↑ おめーもだバカピンク

「エヴァンジェリンさんは、何か良いお考えありませんの？」

「やっと戻って来たか……お前達の会話に付き合うと疲れるよ」

話が脱線しまくる間、周囲に注意を払いながらも木陰に座り込んでいたエヴァンジェリンに、あやかが相談の鋒を向ける。

「実はさつき強力な魔力の発露を感じたんだ。ほーやのものかどうかは解らないが、並の術者ではない事は確かだ。ここからそう遠くないし、まずそこに向かってみようと思う」

「遠くないって、どの辺？」

エヴァンジェリンは、街を大きく越えて向こうに広がる山の裾野あたりを指さした。

「……遠いじゃん！ 滅茶苦茶遠いじゃん！」

「飛んで行けばすぐだよ」

「飛んでって、私ら飛べないよ！ それともエバちゃん、みんなを一緒に連れてってくれるの!？」

言い淀むエヴァンジェリン。明らかに、自分が行く事しか考えていなかったという表情だ。

自分一人であれば、今は学園の外にいて呪いが効力を発揮していないから、空を飛んで行ける。同様に飛べる茶々丸や刹那、あるいは楓なども付いて来られるだろう。しかしクラス全員となるとそうもいかない。かと言って全員揃わなければいけない以上、置いて行く事もできない。厄介だった。

「……仕方がない、歩いて行くしかないな。術者があまり動かないで居てくれれば良いのだが」

## 4. Pastor quum traheret

「もう歩けない!!」

街を抜けてようやく山に差し掛かろうとした頃、幾人かが音を上げた。

肉まん、ごうご。

「情けないアルね、まだ山を登ってもいないヨ」

「体力の修養も必要でござろうな」

「いやー、新体操やってるから、体力に自信は、あるんだけどさー。こんな長時間歩くのは、ちよっと」

「私は、どちらかと言うと、頭脳派なんです……」 ↑ バカレンジャーで、頭脳派と、いうのも、笑わせる……

バカレンジャー中でも体力を誇る菲と楓は息も上がっていないが、まき絵と夕映は座り込んでしまっていた。ちなみに千雨も果てている。

夕映の手には、いつの間に買ったのか、Schwarzer Trank (Kartoffelgeschmack) なる瓶が握られている。

「ええい、お前達、少しは根性出さんか！ ただでさえ何度も休んだせいで日が暮れてしまっ

たんだぞ、このままでは日が変わってしまう！ 昼の術者が移動してしまつたらどうする!？」

「もー、いーじゃん。どうせ日が変わるんだつたら寝ちゃおうよー」

「さんせー」

「この状態でこれから山を登れというのは無理があるでしょう。私も一泊に賛成します」

自分自身は余裕のある利那も、強行軍に異を唱えた。視線の先では、木乃香がへたり込んでゐる。決して虚弱ではない木乃香だが、それこそ本来頭脳派であり、体育会系の生徒すら音を上げるような強行軍は辛い筈だった。

「くっ……全員揃わなくても良いのなら、さっさと置いて行くものを……」

「怒んなつて。一般人を、それもこんだけの人数を連れてかにやならねえんだ、多少の苦勞は歩き始めた時から覚悟してたろ？ 兄貴の方でもこつちを探してるかもしれねえし、手がかりはあるんだからもつとじつくり構えてこつぜ」

「貴様は本性隠して女どもに抱えられてただけだろうが、小動物！」

「まあまあエヴァ殿。今は貴殿が拙者達の担任のようなものでござる。拙者も協力致す故、ここは我慢が肝要でござるよ」

カモミールに煽られて余計憤りに拳を震わせたエヴァンジェリンを楓が宥める。ふっ、と諦めたかのように力を抜いたエヴァンジェリンは、楓に皮肉を込めた目を向けた。

「ガキどもの引率は思った以上に激務だな。ほーやはこんな苦勞をずっとしていたのか」

皮肉ではあるものの、ちょっとネギの気持ち解った気がするエヴァンジェリンだった。

「でもさー、布団もテントも何もないところでどうやって寝るの？」

「うわお、サバイバル生活体験学習！」

「こういう時はー」「さんぽ部にお任せだよー！」

「拙者達はよく木の上で寝たりするでござるが。地上よりは安全でござるよ」

「はいはい、あんたはそうでしょうよ」

「あー解った解った、風避け・獣避け・ついでに面倒避けで人払いの結界を張ってやる。サービスで気温も調節してやろう。腹出して寝ても風邪をひかんようにな」

「あの……私、枕が変わると、ちよつと……」

「知るか！」

## 5. Videre est credere.

その夜遅く。

「起きろ、全員！」

「起きている」

「ふえっ!? ど、どうしたのエヴァちゃん!」

「何、事件!」

「むにゃ、もう食べられない……」

「ZZZZZ……」

起きろと言われて素直に起きるような一同ではない。そんな生徒達を、エヴァンジェリンは容赦なく蹴り起こして回った。

「人払いしているにも関わらず、結界に侵入してきた奴がいる。少なくとも何がしか『力』のある人間だ、用心した方が良い」

『力』? ひょっとしてネギ君?」

「そんな低い可能性で安心はできない、警戒は必要だ……!」

「随分と人数が居るようですね。どなたかな？ この結界は」

「な……貴様は!？」

現れた男の姿を見て、エヴァンジェリンは絶句した。三十歳過ぎくらいに見える、黒い服、やや跳ねた髪、細い眼鏡、そして刀を携えた男。ナギ・スプリングフィールドの仲間の一人、陰陽師にして神鳴流剣士、近衛詠春だった。

「詠春、貴様が何故ここに!？」

「エヴァンジェリンさん……それは私の台詞ですよ。麻帆良学園に居る筈の貴女が、何故学園の外どころか、ドイツのこんな所に居るのですか？」

「私の問いが先だ。貴様から答えろ」

嘆息する詠春。

「ナギ達と各自別れて情報収集してたんですよ。一段落付いたので合流するつもりだったのですが、結界が張られているからナギかと思ったら、貴女が居たと言う訳です」

そういうと詠春は、改めて辺りを見回した。

「麻帆良学園の生徒達も一緒ですか。見たところ半分以上一般生徒のようですが、一体どういふつもりです？ そもそも貴女、どうやって学園の外に出たんですか？」

「……ナギが、近くに居るのか!？」

「今度は私の問いが先ですよ」

菌嚙みしながら、エヴァンジェリンはかいつまんで状況を説明した。九年後の未来で起こったすべて。ネギの教師着任とそれ以来の騒動、そして明日菜の死。ネギが時間旅行し、全員巻き込まれた顛末。この山で魔力の発露を感じ、確かめに行く途中である事を。

「……俄には信じ難い話ですね。タイムマシンなんて、九年はおろか九十年経ったとしても作られているとは思えません」

「そう言われても、できてしまった物は仕方がないネ」

「現に私は結界の外に居る。何ならじじいに連絡して、『私』がちゃんと学園に居る事を確認したら良いだろう。日本は今……夕方だな、『私』は警備をさせられているぞ」

「……そこまで自信あり気に言うのなら、嘘ではないのでしょうか。嘘にしては突拍子も無すぎますし」

「ああ。それに、こいつが何よりの証拠だ」

エヴァンジェリンは一人の女生徒を詠春の前に引き出した。——近衛木乃香、詠春の娘。

「……そうか、九年経てば、中学生か。木乃香、なんだね？」

「父様……」

木乃香は呆然としているような、感激したような、そんな笑顔で、なかなか言葉が出ないようだった。

「随分綺麗になるんだね。はは、お義父さんがお見合いさせようとしている様子が目に浮かぶ



よ」

「父様……」

クラスの一同も、この運命の出会いをじっと見つめていた。涙ぐんでいる者すらいる。

「魔法の事も知ってしまったんだね。何も知らなければ普通の女の子として過ごせるかと思っただけど、いずれこうなる日は来るという事だったのかな」

「父様……」

わっかーわっかーい！」

全員綺麗にずっこけた。

## 9. Την μεν άτην, είτε ημιν.

「そういう訳で、今朝になって私達はこのキャンプを目指して来たんです。そしてついさっき、昨日よりも更に強大な魔力を感じて……唯事ではないと思つて急いだんですが」

ネギの所に辿り着いた2-Aの三十人とカモミール、それに詠春は、車座になって話し合いを始めた。泣き疲れた明日菜は、テントの中で休ませている。

「そうですか、ナギが……。明日菜ちゃんに、また辛い思いをさせないように、旅をしてきたのですが……」

「すみません、僕が居ながら何もできなくて……」

「いえ、ネギ君の言う通り、ナギは君に明日菜ちゃんを託したと見るべきでしょう。力も誠実さも良く解りますし、それに明日菜ちゃんに慕われていますから。私や他の仲間がいずれ来る事も解っていた筈ですしね」

「ふん、あいつがこの程度の事でしたらばるものか。第一、私の呪いをこのままにして死なれてたまるか。今ここで呪いを解かせられなかったのは残念だがな」

お互いにこれまでの経緯を確認したところで、話は核心に移る。

「ねえねえ、そもそもどうして明日菜とネギ君のお父さんが一緒に居たの？ ネギ君のお父さんも魔法使いなんだよね？ 明日菜もそうだったの？」

「いや、姐さんは、魔法消去能力なんつー力は持つてたけど、魔法使いじゃないつよ」

「ネギ君はもうナギから聞いたかもしれないませんが、明日菜ちゃんは元々強大すぎる魔力を持つていて、そのために魔族を引き付けてしまう体質でした。生まれ故郷の村も、立ち寄った村々も、明日菜ちゃんに引き寄せられた悪魔にすべて滅ぼされたんです。明日菜ちゃんを守つてきた両親も、明日菜ちゃんの目の前で殺されました——」

生徒達は皆、初めて聞く明日菜の悲惨な過去に声も出なかった。ただ一人エヴァンジェリンは表情を変えなかったが、茶々丸にはマスターが苦渋の感情を滲ませているような気がした。もしかしたら身に憶えがあるのかもしれない。

「自分自身を呪つた明日菜ちゃんは、悪魔と契約を交わしたんです——自分を含む周囲の魔力をすべて無効化して悪魔の目から隠し、もう自分のために人が死ぬような事が無いようにする。その代償として、本来なら魔力を完全に制御できるようになる頃に自分の命が尽きる。その日は、契約から十年後……今から九年後、明日菜ちゃんの十四歳の誕生日と定められたんです」

そしてその通り、二〇〇三年一月二二日に明日菜は死んだ。ほんの数十分前まで、私達と楽しくパーティをしていたばかりだったのに……誰もがそう思い、涙を思い出していた。

「私達は明日菜ちゃんの契約を破棄する方法を探して、旅をしていたんです。ナギも、私も、

他の仲間達も、多少の悪魔なら迎え討つ事ができます。それだけではなく、明日菜ちゃんの魔力を極力封じて、普通の女の子として過ごさせる事もできます。ですが私達が明日菜ちゃんと出会ったのは、契約を結んだ後だったんです。既にどんな魔法も効果を及ぼせなかった……何とかして一度契約を破棄しない事には、どうしようもないんです」

「貴女達が、明日菜ちゃんが死んだ理由を知りたくて来たと言うのなら……明日菜ちゃんの運命は変えられなかった、という事なのでしょね。私にとつては未来ですから、納得がいきません」

「私達だって納得できないよ、そんなの！」

立ち上がって叫ぶ裕奈。

「過去は変えられないだなんて、そんなの誰が決めたの？ タイムマシンなんてあり得ない、誰も使った事がない、だったら今まで誰も過去に行った人なんて居ないんですよ!? 試しもしないで諦めるなんて、そんなの嫌だよ！」

誘われるかのように、他の生徒達も同調する。

「そやな、こうして過去に来て、原因も解つたんやもん、ウチらにできる限りの事をするべきや！」

「アスナを助けて、みんなで笑って帰ろうよ！」

「う、うん。私も……」

「ネギ先生は、悪魔に縋つてまでアスナ先生を生き返らせようとしていたです。可能性があるのなら……ネギ先生の助けになるのなら、何だってやるです！」

「裕奈さん、木乃香さん、桜子さん、のどかさん、夕映さん……皆さん……ありがとうございます！」

また、ネギを中心に、クラスが一つにまとまろうとしていた。冷静さを失い感情のままに生徒達を巻き込んで時空を越えたネギだが、悲嘆に暮れていた生徒達に希望を与え明日菜を助ける目的のために纏め上げる切っ掛けとなったのも間違いなくネギなのだ。それは立派な先生の力です——五月はネギを優しい目で見ていた。

「あ、青い……何だこの青春学園劇は……。まったく、若さつて奴は……」 ↑ ホント、やってらんねー

「俺たちはこういうの好きだけどな」 ↑ おめーは黙ってる！ いやそもそも喋るな小動物！

「はは、良いじゃないですか。私も、私にとっては過去ではないのに、諦めるところでしたよ。過去を変えられるのならあの子達にもできる事があるだろうし、変えられないとしても私にはまだできる事がある。明日菜ちゃんは絶対に助けてみせますよ」

## 7. O praeclarum custodem ovium lupum!

「詠春さん、これまでアスナさんを助けるために、どういう方法を試して来たんですか？」

「ナギや他の魔法使い達が協力して、魔法消去を打ち破るだけの魔力をぶつけました。戦士達は契約の媒体を破壊しようとはしました。私は明日菜ちゃんの身代わりとなる式神を作り、悪魔との契約を式神に引き継がせようとはしました。……ですが、今のところ何も効果を上げられていません。今は手分けをして各地の悪魔関係の伝承を調べたり、さつきも長生きしている人に聞きに行ったりしていたのですが」

「あの城のクソ親父か？ それでドイツなのか……話にならんだろう、あそこは」

「娘さんが帰って来たとかで警備強化されてて、問答無用で追い返されましたよ」

肩を竦める詠春とエヴァンジェリン。そこへ、前に出る事なく控えていた刹那が加わって来た。

「長、お聞きしたいのですが。式神に身代わりをさせるとするのは……アスナさんの複製を作ろうとされたのですか？」

「ええ。かなり完璧に近い、自律型の式神を作ったのですが……それでも契約をごまかしきれませんでした」

「それは、やはり知性の面での違いが問題になるという事なのでしょいか……」

「あ、いえそういう事ではなく。むしろ明日菜ちゃんの方に問題があったのですよ」

そもそも詠春から学んだ力ではあるが、自身も式神使いである刹那。世界でも有数の術者である詠春が失敗した理由を突き詰めようというのか、突っ込んだ話をしてくる。一同が注目する中、詠春も詳細を語り始めた。

「悪魔との契約には、『契約の証』とも言うべき『媒体』が存在します。それが悪魔に求めた力をもたらすと同時に、契約者を縛るのです。身体に紋章を刻むといったようなやり方もありますが、明日菜ちゃんの場合は——髪に結んでいる鈴がそれです」

「鈴……？ 高畑先生から昔貰った物だと聞きましたが……」

「タカミチ君から？ ふむ、記憶を書き換えでもしたんでしょかね。……とにかく、あの鈴が悪魔との契約の媒体です。あの鈴がある限り、明日菜ちゃんにはまったく魔法の力が働かない。しかし、あの鈴がある限り、明日菜ちゃんは九年後に確実に死ぬ。そして鈴を手放す事は決してできない——」

「あの、でもアスナさん、鈴を外した事もありましたわよ？ お風呂に入る時とか……」

「一時的になら、外す事もできます。けれどもずっと外し続けたり、まして捨てたりする事はできません。契約によって明日菜ちゃんと鈴は、互いに引き合ってしまったって感じです。だから、私が式神で明日菜ちゃんと寸分違わぬ複製を作った時も、鈴を騙して式神に着けさせる事

はできたのですが——」

「アスナさん自身が、鈴を引き寄せてしまう……そういう事ですか」

「ええ。そして鈴自体は、悪魔が作り出した魔界由来の物です。更に魔法消去の内側で巧妙な認識阻害の魔法がかけられているので、知らなければただの鈴にしか思えない、知っていてもその仕組みを調べる事ができない——複製が作れないんです」

だから自分は鈴の素性を調べるために旅をしていたのだ、と詠春は言った。他の仲間達も、戦士は戦士の、魔法使いは魔法使いの、それぞれのやり方で明日菜を救おうとしているとも。

「と言っても、明日菜ちゃんを一人にはできませんから、交替で一人か二人は一緒に居るようにしていたんですけどね」

「今はネギ先生のお父さんがその役割だった、と」

「父さんは……どうやってアスナさんを救おうと考えていたんでしょうか……」

「流石のナギも手こずっていましたね。上位悪魔を脅して直接聞き出そうなんて言ったりもしていました、でもそもそも上位悪魔はそう滅多に現れるものではありませんし」

詠春はあっさりと言うが、上位悪魔を脅すなど唯事ではない。しかしネギはともかく生徒達は、あまりの話に理解が追い付いていなかった。ナギの事を良く知るエヴァンジェリンは呆れていたが。

「今の私に思い付く方法は、明日菜ちゃんの複製に本物の鈴を着けさせ、本物の明日菜ちゃん



には複製の鈴を持たせる——どうかして鈴を複製する方法を見つけ出す、これだけです。情けない限りですが、皆さんから良い考えがあれば喜んで承りますよ」

## ∞ Che a compagne a padrone

「あの……もしかしたら、これが使えらんじゃないでしょうか……」

明日菜を救う方法を求めて喧喧囂囂の議論が始まるかに思われたが、ほんの少しの間だけ考え込んでいたネギが、すぐに詠春に提案してきた。ポケットから取り出した手には、小さな物が握られている。

「何です、ネギ君。それは……」

握っていた手を開くネギ。そこには、焼け焦げてひしゃげた、小さな塊があった。

「アスナさんの……九年後に亡くなったアスナさんが、最期まで着けていた、鈴……です」  
「……何ですって!？」

それは紛れもなく、五歳の明日菜が髪に着けている四つの鈴と、同じ物だった。明日菜が茶毘に伏された後、学園長が拾い上げていたもの。学園長室でそれを見付けたネギが持ち出したもの。——今、この一九九四年の世界に存在する、五つ目の鈴。

「父様、それでアスナ、助けられるん？」

「ああ、多分……いや、きっと。これなら……この鈴を使えば……!」

「やった、凄いやネギ先生、お手柄やん!」

「運命を変える鍵は、未来から来たネギ君の手によって伝えられた！ これは燃える、燃える展開だよ！」↑ゲームかつっの

「私にもそういうの、ないかな……」

「でも、どういう事ですか、詠春さん、ネギ先生？」

「解る夕映、のどか？」

「え、えと……」

「話を聞きます」

解決策が見付かったかと、俄然盛り上がる生徒達。エヴァンジェリンのように懐疑的な者や、千雨のように我関せずといった態度の者も居るが、ほとんどは期待の目を詠春とネギに向けていた。先走ってお祭りを始めかねない者も居たりするが。

「アスナさんと悪魔の契約の『媒体』である鈴は四つ……でもここに五つ目、それも契約を果たした後の鈴があるという事は、詠春さんが鈴の正体を掴む切っ掛けになるかもしれない……僕はそう思っただけです。詠春さん、どうですか？」

「それどころじゃないですよ。これは契約を交わしてから十年間、明日菜ちゃんと共にあり、そして契約を果たした後の鈴です。であれば、魔力消去の力も、二〇〇三年に明日菜ちゃんの命を奪う力も、もう使い果たしている。でも力は失っていても、これが明日菜ちゃんと悪魔との契約の証である事に違いは無い——」

興奮を抑え切れず声を振るわせながら、詠春は語る。

「この鈴を明日菜ちゃんに持たせ——結び付きが足りないというのならば、魔法的に融合させてでも——そして今明日菜ちゃんが着けている鈴を、私を作る式神、明日菜ちゃんの複製に着けさせる。そうすれば、明日菜ちゃんと鈴、両方の契約を騙す事ができる——明日菜ちゃんを、契約の縛りから解放する事ができるんです！」

固唾を飲んで聞き入っていた一同は、次の瞬間、一斉に喚声を揚げた。

「「「やったあ!!」」」

「良かった……これでアスナさんは助かるんだ……九年後に、死ななくて済むんだ！」

「感動だ……感動だよ！ ネギ君、凄いよ！」

「いやあ、このクラスになって良かった！ こんな劇的な体験ができるなんて、このクラス、最高だよ！」

「ネギ君のおかげだよ！ 明日菜を助けてくれて、ありがとう！」 ↑ 本当にクサイ青春ドラマになりやがった

「いえ、タイムマシンを使わせてくれた、超さんと葉加瀬さんのおかげです。お二人とも、本当にありがとうございました！」

「気にしないで下さい。鈴を持って来たネギ先生が一番の功労者ですよー」

「私達こそ、データが山ほど取れているから、お礼を言いたいくらいネ」 ↑ 利己的に動く奴の方がまだ信用できるな

「おっしゃー、こいつは記事になるぜー!! まほら新聞特報版大増刷決定ー!!」

「朝倉さん、魔法の事ってバラしちゃったらずいんですよ?」

「それにこれで、アスナが死んだって事も無かった事になるんだから、記事にならないと思うけど……」

「うっ!」

本当にお祭り騒ぎになりつつある中でも、冷静に考えている者も居る。例えば、茶々丸。

「ハカセ、未来が変わるとなると、その影響はアスナさんだけに留まるものではないと思われるのですが……」

「バターフライ効果ですわね。その影響がどう出るかも含めて、データ取ってるんですけどね」

「ロクでもない事にしかならないと思うがな……」

「何何? バターフライって何?」 ↑ 食い物じゃねえっ!

「簡単に言うと、ちよつと歴史を変えるだけに思えても、九年後の世界では『アスナさんが死なない』という以外にも大きく影響が広がるだろうって事です。例えば、クラスの誰かが麻帆良学園以外の学校に進学しているとか、ネギ先生が来日しないとか」

「えーっ、そんなの嫌だよー！」 ↑ いっそ全部無かった事にしてもらいてーよ

「例えばの話ですよー。でも何の影響も無いって事はあり得ないんですけどね」

「アスナを助けるのは大前提だもんねえ……ま、何が起こるかわかんないんだったら、恐がってないでやってみようよ！ きっと大丈夫だよ！」

「おおっとー、ギャンプル女王のお墨付きが出たぞー！ 勝てる、この賭けには勝てるよみんな！」 ↑ 勝ちって何だよ勝ちって

## 6. Mane, Tekel, Fares.

「ちょっとお待ち下さい！」

お祭り騒ぎどころか完全にお祭りになっているネギや生徒達の中で、騒ぎに加わらずに考え込んで居る者も居た。そして、騒ぎの中からも全員を注目させられる凜とした声を発したのは、あやかだった。

「どしたの、いいんちよ？ 何かあった？」

「水を射すように申し訳ありませんが、どうしても引つかかるところがあるんです。……詠春さん、お聞きしてもよろしいですか？」

「ええ、何でしょうか」

詠春の前にはネギも居るのだが、あやかはまったく目を向けようともせず、ほとんど睨み付けるかのような視線を詠春に向けていた。こんな恐い表情のいいんちよさんは初めてだ——ネギはふと、そう思った。

「小さなアスナさんが、ネギ先生が持って来た鈴を持つのですよね。代わりに式神のアスナさんが、悪魔の鈴を持つのですよね。……詠春さん、それから二人のアスナさんはどうなりますの？」

「……そうですね。もつと深く考えるべきでした。悪魔との契約を引き継ぐ方が『明日菜ちゃん』でなくてはなりません。ですから式神の方が、これから明日菜ちゃんとして九年間を生きる事になります。そして本当の明日菜ちゃんは、別人として九年間を生きる事になります。名を変え、姿を変え」

それまでの大騒ぎが嘘のように、生徒達は静まりかえっていた。どういう事か解らない——困惑の表情。あやかも暫く詠春の言葉を噛みしめていたが、次の瞬間、泣きそうな表情で叫んだ。

「それでは！ 私と、私達と一緒にアスナさんは、ネギ先生が助けようとしていたアスナさんは、式神のアスナさんなのではありませんか!? だとしたら結局、九年後に亡くなってしまう事に変わりはないじゃありませんか!」

全員、あつと驚き、そしてお祭りは一瞬にして絶望へと変わった。九年後に死んでしまう明日菜の運命を変える、そのために時間を越えた筈だったのに……その明日菜が元々、本物の明日菜を助けるために、身代わりで死ぬために生み出された存在だったとしたら?

「私達は、歴史を変えようとしているのではなく、同じ事を繰り返そうとしているだけ……!?!」

「そんな……それじゃあ、ネギ先生せんせいの……」

「ネギ先生のしてきた事は、全部無駄な事だったですか……!?!」

「私達やネギ君のタイムスリップも、元々歴史に織り込み済みだった、って事か……!」



歴史を変えざるより、よほど辻褄が合う。すべて歴史に織り込み済みだとしたら、バタフライ効果も何も関係ない。そして、納得できてしまう事が悲しく、悔しい。

「ふん、言っただろう、死んだ人間を生き返らせるのは不可能だと。既に起こった事実を変えられないと。我々の知っている『神楽坂明日菜』は、二〇〇三年一〇月二二日に死んだ。だが、そのお蔭で一人の人間が助かったのだとしたら、むしろその事を喜ぶべきではないのか？」

「いや、でも！ だけど、そうだけど、だつて！ ……納得できないよー！」

愕然としているのはネギも同じ。縋るような目で、詠春に問いかける。

「詠春さん……そんな、そんな事、ないですよね？ アスナさんは、元気な姿で、僕達の前に居てくれるんですよ!？」 ↑ とう簡単にはいかない、つて事だな

「それは……」

「詠春さん！」

「……ちよつと確認させて下さい。突然妙な事を聞きますが、君達の知っている『明日菜さん』は、頭は良かったですか？」

本当に妙な事を聞かれて、戸惑うネギと生徒達。刹那だけ、その意味にはっと気が付き、表情を暗くした。

「いえ、アスナさんは、まるでその逆でしたわ。いつも成績は下から数える方で、平均だと最下位の……」

「英語なんか補習の皆勤だったアルよ」 ↑ 偉そうに言うな

「それは私達全員でしょ」

「『私達』言うな！ バカレンジャーだけやん！」

「悪かったですね。……それが、一体どういう関係があるですか？」

「そうですか、ネギ君、皆さん……残酷なようですが、君達が、君達の求めた『明日菜さん』と、再び会える日は来ないかもしれません。『明日菜さん』はまず間違いない、式神の明日菜ちゃんです」

ネギの期待に背き、詠春はそう断言した。もう完全に泣き顔になりながら、何故、と問い続けるネギに、詠春は答える。

「明日菜ちゃんは、とても頭の良い子なんです。利発というだけじゃない。もっと幼い頃から旅を続けていた事もあり、五歳という年齢にも関わらず——ネギ君、明日菜ちゃんとナギは、それに君は、何語で話していましたか？」

あつ、とネギは気が付いた。その時は全然気にしていなかった。父さんと話す事が多かったし、気になる事をもっと沢山あった。だけど、今思えば確かに——

「英語……でした……」

## 10. Dum inter homines sumus, colamus humanitatem.

哑然とする生徒達。あの明日菜が、頭が良い？ 英語で会話？ 想像も付かなかった。だが、  
 続く詠春の言葉は、更に信じがたい事を告げた。

「明日菜ちゃんは、両親の言葉である日本語を母語として、私達と旅をする間に英語、スペイン語、フランス語、オランダ語を身に付けています。ドイツ語ももう読み書きは問題ないくらいですよ。言葉だけでなく、あの子は一種の天才です。魔力消去の鈴を取り除いて、きちんと魔法を学べば、魔法使いとしても一流以上になれるでしょう」↑ おいおい……

「し、信じられないアルよ！ アスナが、英語!? ドイツ語!? 天才!? そんなバカな事、あり得ないアルよー!!」

「ネギ君、本当なの!?!」

「僕や父さんと、英語で話していたのは、確かです……」

「すると、私達の知るアスナさんが、どうしてバカレッドなのか、気になるのですが……」  
 「完全自律型の式神だからでござろう、刹那」

別の意味で仲間を失ったと、騒ぎ出すバカレンジャー達。楓から話を振られて、刹那が進み出る。

「式神と術者、この場合は術者以外の素体ですが、その間には強い繋がりがありません。式神の目で見た物がそのまま術者にも見えるなどの利点がありますが、代わりに術者が式神を意識的に維持しなければなりません。けれど術者がある程度熟達していれば、常に意識している必要のない、自律型の式神を作ることができます」

そう言つて利那は、こんな感じですよ、と自分の脇に小さな式神を出してみせた。見た目、二頭身になった利那という感じである。

「あ、ちっちゃいせつちちゃんやー」

「こんにちはっ♪」

研ぎ澄まされた刃物のような印象を受ける利那と違い、非常に愛くるしい式神——利那曰く「ちびせつな」——に、木乃香は目を輝かせた。今、こんな場でなければ、他の生徒達と一緒に抱き締めたりしていたところだろう。

「長ほどの力があれば、ほとんど普通の人と変わらない、少なくとも肉体的には完全な複製と呼べる式神が作れるでしょう。その代わり、自律型の式神は、知性が術者や素体よりも劣りません。知性だけでなく、精神面も様々に変わってしまいます。こればかりはどれほど強い力があつても複製できない点なんです」

「確かに、桜咲とはまるで違って明るい感じだねえ」

「すいません、ちょっとバカなので〜」（てへへへへ）

本物の刹那より相当に性格が明るいちびせつなをじつと見つめ、ネギは嘆息した。確かに、昨日出会ったアスナちゃんは、僕の知っていたアスナさんと違って、元気に振る舞っている。どこか陰があった。まだ五歳だからとか、悪魔との契約を憶えているからだとか、そう思っていたけれど——式神との性格の違いだとしても不自然じゃない。

考えれば考える程、自分が求めていた明日菜は式神なんだという思いの方が裏付けられていってしまう。誰も納得していないながら、反論はできなかつた。

## 11. 無悪善

「もう、良いよ……」

悶々とした空気が支配する三十三人と一匹の輪に、その声は外から届いて来た。皆が一斉に振り向くと、泣きつかれて眠ったものだと思っていた明日菜が、何時の間に目覚めたのか、そこに立っていた。

「アスナちゃん……聞いていたんですか……?」

「うん、最初から。……詠春、私の事は良いから、この人達の『明日菜』を助けてあげて」

「いや、しかしそれは……」

「私は厄病神で、沢山の人を殺した死神で、どこの町にも居られない嫌われ者けど、私じゃない『明日菜』はこんなにも慕われているんだもん。式神を作って、鈴を渡さなければ、九年経つても『明日菜』は死なないんでしょ?」

「そんな悲しい事を言わないで下さい!」

自分自身を切り刻むような言葉を無表情に紡ぎ出す明日菜に、辛抱たまらずネギは叫んだ。明日菜の肩を掴んで振り向かせ、一気にまくしたてる。

「アスナちゃんは、嫌われてなんか居ません! 僕はアスナちゃんが好きです。父さんだって

そうです。詠春さんだつて、仲間の人達だつて、みんなアスナちゃんが好きだから、守りたい  
って思つたんです！ 確かに、僕達が最初に助けたいって思つたアスナさんは、アスナちゃん  
じゃなかったかもしれません。だけど、そのアスナさんが、アスナちゃんを守りたいって、そ  
う思っていたんですから！」

いつになく真摯なネギの表情と、その勢いに、明日菜も詠春も誰も、声を挿し挟む事ができ  
なかつた。ネギは更に続ける。

「あの時アスナさんは、一〇月二二日が契約の日、自分が死ぬ日だつて知っていました。カレ  
ンダーにわざわざ丸を付けて、だけど誰にも相談しないで一人で悩んで。そして真夜中の鐘が  
鳴る直前、初めて涙を流しながら、僕に何か言つたんです。その時、僕は良く聞き取れなかつ  
たし、意味も何だか解らなかつたんですが、今思えば『明日菜を助けて』って言っていたと思  
うんです。今、アスナちゃんが言っていた言葉と同じように！」

「私を……？」

「そうです。アスナさんは、自分が式神だという事も、アスナちゃんを助けるために、死ぬた  
めに生まれたんだという事も、思い出していたんです。僕達が過去に跳んで、こうしてアスナ  
ちゃんを助けようとする事も、かもしれませぬ。僕はアスナさんを助けたかった、けれど歴史

は変えられなかった……だったら、僕はアスナさんの思いを守りたい。アスナさんの思いを伝えたい。アスナちゃん、君はこれから二人分の『神楽坂明日菜』を背負って生きていくんです。儀式で記憶を失い、別の人になったとしても、九年後にはもう思い出しても良くなっている筈です。僕がアスナちゃんに、本物の『アスナさん』に、もう一人の『アスナさん』の事を伝えます。麻帆良学園でクラスのみなどと一緒に過ごした、元気で、強気で、成績は悪いけど、一生懸命で、優しく、誰からも好かれていたアスナさんの事を！」

だから君は生きていて欲しい、生きていなくちゃいけない、明日菜の思いを受け取るために——そう言つてネギは小さな明日菜を諭した。目を見開いてネギの言葉を受け止めていた明日菜の目に、いつしか涙が溢れていた。ネギの袖を掴んで、うん、と小さく頷く。これが新たな契約になるでしょう——明日菜と、もう一人の明日菜の。そんな事を思つた者も居た。

「皆さん、勝手に決めてしまつて済みません。でもこれが一番良いと思うんです。アスナさんを助けようと真つ先に暴走して、皆さんを巻き込んでしまつた僕が言うのも、どうかと思いませんけど……」

「ううん、それはもう良いんだよ。ネギ君の考えは正しいと思う」

「——やつと、アスナさんが亡くなつた事、受け入れられそうですわ」

「納得できちゃつたから、仕方ないね。私達もアスナの事、忘れないようにしなくちゃ」

「エバちゃんの言つた通りなんだね。アスナちゃんが助かる事を喜ぶべきなんだ」



「他人を犠牲にできない優しいとこ、そっくりや。やっぱりこの子、アスナなんやなあ」  
ネギの思い、そして死んだ明日菜の思いが全員を動かした。もう誰も反対しない。

## 12. Pede claudio.

「ネギ君、皆さん、済みません……ありがとうございます。明日菜ちゃんは私、近衛詠春が責任を持って預ります。式神を作るのは、他の魔法も絡んで来るので仲間が集まってからになります。皆さんは一足先にお帰り下さい」

「宜しく願います、詠春さん」

今ここにいる明日菜を全力で助けると決まり、『鈴』も詠春の手に渡った。これで歴史の輪は閉じた。ネギ達がこの時代でできる事はもう何も無い——後は現在に帰るだけだ。

「では改めて、ネギ先生を含めて全員揃いましたけど……超さん、これで問題は無いんですね？」

「まずはネギ坊主、タイムマシンを出すアルよ」

「あ、はい」

ネギはポケットから、懐中時計の形をした機械を取り出した。

「これがタイムマシンとやらか……こんなもので本当に九年もの時間を越えられるのか？」

「現に九年前に来ているんだから、今更気にしないアル。……だけど、これだけだと足りないアルな」

「ええっ!? まだ何か必要なの?」

「タイムマシン本体と、動力源としての魔力。それに制御端末が必要ですよ。元々実験段階だったものだから、タイムマシンとしての機能はちゃんとしているんですけど、単独で操作できないんですよ」

ネギが工学部の研究室でタイムマシンを使った時は、備え付けの機械で魔力の供給を制御していた。結果としてネギが魔力を暴走させ、クラス全員が巻き込まれる事になったが、制御端末は転送されていない。同等の物が必要だ——そう聡美は説明した。

「来た時のラインを辿る事ができるので、行きよりは帰りの方が楽なんですけど、大掛かりな装置は要らないとしても、せめてパソコンくらいの物は無いと……」

「パソコンって、私達の時代のレベルで言ってるんだよね? 九年前っていうか今のじゃなくて」

「はいー。だから現地調達はちょっと厳しいです」

「いや、問題ないだろう」

危うくまた深刻な話になりそうなところで、エヴァンジェリンが助け船を出した。

「魔力はばーやが居れば充分だし、また暴走するようだったら私がサポートしてやる。そして端末は——そいつなら何か一台くらい、いつも持ち歩いていると思うぞ」

帰るのにも苦労するとは、つくづく迷惑な…… ↓ 「って、私かっ!」

エヴァンジェリンが指さした相手は、千雨だった。突然表舞台に引き摺り出され、盛大に狼狽している。

(子供教師にロボに吸血鬼に魔法使い、挙げ句タイムスリップなんて非常識をオンパレードでやらかしておいて、今度は私のモバイルを使うだ?! ふざけるんじゃないよ!! 私はおめーらなんかに関わりたくもねーんだよ!)

「貸して下さいます?」

「~~~~っ!! 勝手に持って行けえっ!!」

内心で絶叫している千雨に、聡美は有無を言わさぬ笑顔で迫る。思わず一步後ずさりしたのが千雨の敗北だった。ポケットから取り出したPDAを押し付ける、というより叩き付けるようにして渡す。

「ありがとうございます。これで端末が作れますよ」

言うが早いか、聡美と鈴音は一瞬でPDAを半分近く分解し、タイムマシンと直結させてしまった。盛大に部品が余ったり、付け加えられたりしているところを見ると、もう元通りには戻らないかもしれない。

「う……うわあああ~~~~っ! だからイヤだったんだっ!! 違うだろっ! フツの中学生の学生生活はこうじゃないだろっ! 何で私がこんな目に~~~~っ!!」

頭を抱えてのたうち回る千雨に、協から和美が近付き、周囲から見えないようにデジタルカ

メラを差し出す。千雨が注視したディスプレイには、普段からは想像もできない程晴れやかな笑顔を浮かべた千雨が映っていた。更にもう一枚めくると……それはネギの演説に、千雨が感動している図だった。

「!!」

「こういう表情できるんなら、黙ってあんたも協力しなつて。それともこの写真、バラ撒いて良い? 『ちうちちゃん』のプライベート写真込みで」

「……………もう嫌だあああつっつっ!!!」

千雨が泣きながら沈黙したので、タイムマシンの準備はあつと言う間に終わった。本体はネギが持ち、エヴァンジェリンがバックアップ。制御端末を聡美がせわしなく操作し、鈴音が脇から覗き込んでいる。

「いきますよー」

「みんな、できる限り集まるネ」

「詠春さん、アスナちゃん、さようなら……また、会いましょう!」

「ネギ君達も、元気で。木乃香、お義父さんによろしく。刹那君、戻ってからも木乃香の事を頼みます。ずっと友達で居てやって下さい」

「父様……………」

「長……………」

魔力が高まり、次第に周囲が白くぼやけていく。

「ねえせつちゃん。さっきのちびせつなちゃん、あの場で作ったんじゃないやろ？　ずっと前から居たんやろ？」

「お、お嬢様、どうしてそれを!？」

「せつちゃんは、ずっとウチを守ってくれてるんやもん。きつとちびせつなちゃんも、ウチのために居るんやろう、って思て。でもな、ウチはせつちゃんに、側に居て欲しいんや。ただ守って欲しいんやない。ウチかてせつちゃんを守りたいんよ。せつちゃんは、ウチの一番大切な人やから」

「お嬢様……このちゃん……」

タイムマシンが発する甲高い音で、外の音も段々聞こえなくなってくる。だがその声だけは、ネギの耳にはつきりと聞こえた。

「ネギ……私、きつとあんだの事、憶えてるから！　忘れても、絶対思い出すから！　だから

——！

「アスナちゃん……!」

「……ふん。死んだ後も勝手な奴じゃ。一人息子を放つたらかして彷徨つた挙げ句、他所の娘まで連れて来よるとはの」

「死んではいけない筈ですがね……。お願いします御老人、他に頼れる人が居ないんです。ここならこの子を守る事もできるし、それに私達はみ出し者よりよほどまともに子育てができるでしょう」

「当たり前じゃ。貴様等と一緒にするな」

「私達と旅をしている間も、この子は笑う事がありませんでした。苛酷な運命から逃れる事ができた今、優しい心に似合つた笑顔をいつも浮かべて居られる、そんな子になつて欲しいと言うのが、ナギを含む私達一同の願いです。どうか……お願いします」

「慇懃無礼で傲岸不遜で傍若無人で迷惑千万なお主にそこまで頭を下げられては、仕方がありません。儂が責任を持って預る。守るべき子供が一人から二人になつただけの事じゃ——」

—\*—

—\*—

13. *Res firma mitescere nescit.*

「詠春さん。アスナさんが今、どこでどうしているのか、教えて下さい」

「——無事、歴史の輪は閉じたようですね」

明日菜を救うための旅から現在に戻ったネギは、早速京都の詠春に電話をかけた。詠春はすべて承知しているかのように、何も聞かずにそれからの事を話し始めた。

「あの後私と仲間達は、予定通りに明日菜ちゃんの式神を作り、鈴を引き継がせる事に成功しました。式神の明日菜ちゃんはその後私ともう一人が日本に連れ帰り、タカミチ君に預けました——私の家では、西洋魔術師と関わりがある者が嫌う者が多いもので——。そしてタカミチ君が、麻帆良学園に明日菜ちゃんを連れてきたんです。後の事は、クラスの子達の方が詳しいでしょう」

確かに、初等部の頃から学園に居た生徒なら、特にあやかや桜子のようにずっと一緒にクラスだった生徒なら、入学してからの明日菜の事を誰よりも良く知っているだろう。あるいは保護者である学園長も、あるいは後にはルームメイトになった木乃香でも。

「ですが、本物の明日菜ちゃんの行方は——私にも判らないんです」

「……どういう事ですか？」



「本物の明日菜ちゃんは、魔法消去の力を失ったためそのまままた悪魔を呼び寄せてしまうので、魔力を極力封じておきました。封印は段階を経て解けるようにしてあり、普通に魔法使いとして修行すれば、少なくとも下級悪魔くらいなら自力で退けられるくらいになれる筈です。更に万一、それよりも早く悪魔が現れてしまった時にも守れるよう、魔法使いの里へ預ける事になったんです。仲間の一人が、信頼できる人を知っていると行って、一人で明日菜ちゃんを連れて行きました」

ところが、どこへ連れて行ったのかその男は話さなかった。いざれ判る、なんて意地悪く焦らし続けて、そしていつしかその男自身が戻ってこなくなつた——そう詠春は語つた。性格はひねくれているが責任感はある男だから、明日菜ちゃんはきちんと『信頼できる人』に預けられたはずだと信じていますが、とも。

「勿論それからあちらこちらの里を訪ねて回つたのですが、名前も姿も変わり記憶も無くした明日菜ちゃんを探すのは難しく……こんな事なら、何としてでも聞き出しておくべきでした」  
「いえ、無事なんだと判ればそれで充分です。それこそ何としてでも、アスナさんは僕が探し出してみせます」

明日菜の居場所が判らないと聞いて、最初はがっかりしたネギだったが、元々このくらいの事は予想していた。明日菜に伝えたい事がある。だから明日菜を探さなければならぬ。今、僕が一番しなければならぬ事はそれなんだ——決意を固めて、ネギは学園長室の扉を叩いた。

「失礼します」

学園長、近衛近右衛門。木乃香の祖父、詠春の舅、そして明日菜の学園での保護者。

「戻ってきたか、ネギ君。無事、アスナちゃんを——本物のアスナちゃんを助けてきたようじやな」

「学園長先生、知ってたんですか？ アスナさんの事を」

「無論じゃ。詠春から聞いておった。何事もないように振る舞うべきじゃと思うとつたから、ずつと黙っておったがの……ネギ君や生徒達には辛い思いをさせてしまつて、すまなかつたの」

「いえ、それはもう……。あ、ということは、学園長先生が『鈴』を持っていたのは……」

「必要になると、解つておつたからの」

ネギが過去に持ち込んだ『鈴』は、明日菜の葬儀の翌日に学園長の机で見付けたものだった。大切に箱にしまわれていたが、良く考えればその箱ごと無造作に置かれていたと思う。わざわざ箱に「神楽坂明日菜」と書いて、ネギがすぐに見付けられるように。

「では、学園長先生は、アスナさんが今——」

「スマン、それは僕にも判らん。僕が知つておるのは、アスナちゃんが学園に来てからの事以外は、詠春から聞いた事だけのじゃ。後は魔法使いの里を探し歩くにあつて、紹介状を書くなどしたくらいじゃな。あんな事件が無ければ、スタン殿にも——おつと」

スタン。ネギには懐かしい、それでいて苦い思い出のある名前だった。ネギが生まれた里に

住む老人で、口が悪く父ナギの悪口を良く聞かされたが、ネギの事をいつも何かと気にかけてくれた優しいお爺ちゃん。だが、ネギが三歳の時に起きた事件で、ネギを守って石化してしまつた。里で生き残つたのはネギ自身と、姉——本当は従姉弟——のネカネだけ。

ネカネお姉ちゃんに聞けば、何か解るかもしれない……そうネギは思った。

「学園長先生。僕はアスナさんを探したい。アスナさんに、僕の生徒だったアスナさん、皆の友達だったアスナさんの事を伝えなきゃならないんです。九年前にアスナちゃんと約束したんです。だから——」

## 14. Frailty, thy name is woman.

「起立！ 気をつけ！ 礼！ おはようございます！」

過去への旅から戻ってから数日。2-Aのクラスにも、やっと日常が戻ってきた。明日菜の居ない三十人のクラスになってしまったけれど、明日菜を忘れてはいないけれど、笑顔で過ごしている。大体元通りの騒がしいクラスだった。

「皆さん、おはようございます。早速ですが、大切なお話があります——」

生徒達と同じく、笑顔を忘れていない、けれど決意を固めた表情のネギ。魔法使いであることが全員にバレて以来、肩には堂々とカモミールを乗せている。何々、と顔を向ける生徒達に、ネギはその決意を告げた。

「アスナさんが亡くなったから、今日で十日になります。その間、皆さんと一緒に過去へ行つて、アスナさんが亡くなった理由も判りました。その時に言いましたが、本物のアスナさんに、皆さんの友達だったアスナさんの事を伝える——そう僕は決めています。ですが、本物のアスナさんが今どこにいるのか、詠春さんにも判らないそうです」

一旦言葉を切つて、生徒達を見回すネギ。

「だから僕は、アスナさんを探します。もう一人のアスナさんの事を伝えるのは、僕がやらな

きやならない事だから。アスナちゃんとそう約束したから。だから——僕は、麻帆良学園中等部教員を、退職する事にしました」

また一瞬、時が止まった。ネギ先生が、退職——信じられない、信じたくない、何を言っているのか解らない……そんな思いが暫く教室を支配した。

「ちょ、ちよつとネギ坊主、どういう事アルか!？」

「ネギ君！ 先生辞めちゃうつて、どうして!？」

「そんな、アスナさんに続いて、ネギ先生まで居なくなると言うんですか!？」

「嫌です！ そんなの、絶対に!！」

「ま、まあまあ、皆さん落ち着いて下さい。何も今すぐに、という事じゃないんですから」

「学園長にも力一杯引き止められたつすよ。兄貴はアスナの姐さんだけの先生じゃない、クラス全員の先生なんだつてね。だけど兄貴、一度こつと決めたら曲げようとしない、頑固なところがあるつすからねえ……代替教員が確保できるまで、引継ぎが終わるまで、つてそこまで譲歩すんのが限界で」

「カモ君は止めなかったの?」

「止められたつすよ、勿論！ こんな(廿の子ばかりで)天国な場所、そうそう居着く機会なんてないんすから！ だけどこんな固い決心した兄貴には勝てないつす……」

別の意味も含めて、苦悶の涙を流しているカモミールだった。だが自分の欲のためにネギを一人で放り出したりしないのが、ネギに従うと誓って以来の彼の決意である。自分だけが学園に残っても、それこそ放り出されるのがオチだと解っているからでもあるが。

「もう、決めちゃったんだね、ネギ君……」

「はい。皆さんには本当に申し訳ないと思ってますけど……」

「ううん。これは、あのタイムスリップの延長だよ。ネギ君が本当にアスナの事を思ってる事だから、私は止めない。淋しいことは淋しいけど、アスナにこの事を伝えて欲しいのも本当だもん」

「でもネギ先生、マジ……なんとかの修行中で、先生をやっているのは卒業試験のようなものだ、仰っていませんでしたか？ それを途中で退職してしまうのは宜しくないのでは……」

「はい。免状は貰えなくなるでしょうね。でも、そんなのは今じゃなくてもできる事ですから」

「ぼーやの父親も、魔法学校は中退だ。立派な魔法使いになれるかどうかは、正規の魔法を学び正規の手続きを踏んだかどうかとは関係ない。……しかし、クソ真面目なぼーやが、こんなところで父親と同じ道を辿るとはな」

「ネギ君、アスナによるしくな……て、まだ早いか、それは」

「だけど今からやっちゃうよー！」「ネギ君の誓いを応援するのよ♥」「チアリーダーの……いやー！」

「『Aクラスメイトの名にかけて!!』」

「嫌です!!」

応援ムード一色のクラスに、正反対の絶叫が響いた。全員驚いて振り向くと、輪から外れて小さな拳を握り締め、涙を浮かべた少女が居た。

「夕映……」

「私は、嫌です！ ネギ先生が、居なくなるなんて！ アスナさんを探すんだったら、他の人も良いじゃないですか！ アスナさんが見付かってから、それからネギ先生が会いに行っても良いじゃないですか！ どうしてネギ先生が、どうして！ どうしてアスナさんなんですか!? 行かないで、居なくならないで下さい！ 私は、私は……!!」

「ばしーんっ!!」

誰もが驚いた。夕映の絶叫よりも激しく驚いた。錯乱する夕映を平手打ちしたのは、のどか

だったのだ。

「しつかりしてよ夕映！　いつもの冷静な夕映はどこに行つたの？　夕映、私に言つたよね。

私は本当にネギ先生の事が好きなのかつて。同じ事を言うよ、夕映は本当にネギ先生の事が好きなの？　自分の気持ちじゃなくて、先生の気持ちを考えたことがあるの？」

「のどか……」

「今ならはつきり言えるよ、夕映。私はネギ先生が好き。先生の思いが叶って欲しい。そのためにお手伝いがしたい。ネギ先生がもしアスナさんを好きだったとしても、それでも先生の力になりたい！」

そう言うとのどかは、ネギに向き直つて言った。

「ネギ先生。アスナさんを探す旅に、私も連れて行つて下さい!!」

「[[[[ええええええっ!!]]]]」

ネギの退職宣告からこつち、ずっと驚きっぱなしだった生徒達だが、ここに来て驚きが頂点に達した。ネギを笑つて送り出そうとはしていても、まさか自分も一緒に行こうだなんて。そんな事を考えた者は、のどかの他には居なかつたのだ。ネギを好きな者も、明日菜を好きな者も、理系も文系も体育会系も、表社会の者も裏に通じる者も。



「私、アスナさんの代わりにはなれないかもしれないけれど、アスナさんが見付かるまでの間だけでも、私がネギ先生のパートナーになります。力に、らせて下さい。お願いします——！」

## 15. افوج يا همام!

「ちよつと良いかな、ネギ君」

のどかの爆弾発言によるショックにクラスが覆われている中、突然扉が外から開けられた。入ってきたのはタカミチ・T・高畑。ネギと同じ英語科の教員で、去年のクラス担任。……そして、学園に来た式神の明日菜を預かった本人。

「う、うん。どうしたの、タカミチ？」

「ネギ君にお客さんが来ているんだよ」

そう言つてタカミチは、扉の影に居た人物を教室の中へと導き入れた。魔法使いのローブを身に纏い、フードを目深に被つた、タカミチと並ぶと小柄で細身の人。誰だろう、と生徒達がざわめく中、その人はネギの前に立ち、フードを外した。

「！——ネカネお姉ちゃん!? どうしてここに……」

やつて来たのは、ネギの姉（従姉弟）のネカネ・スプリングフィールドだった。

「アスナ君が亡くなったすぐ後、ネギ君の様子が心配だね。お姉さんに連絡したんだよ。そうしたらこっちに来るって仰つてね」

「久しぶりね、ネギ。本当に——」

ネカネはネギの頭を撫でて、言った。

「でも、あなたはどこにも行かなくて良いのよ。あなたの誓いは、もう果たされているの」

「……どういう事？ 僕は、アスナさんに……」

ふふっと柔らかく笑ったネカネは、生徒達に身体を向けた。そして、あの人ネギ先生のお姉さん、と囁いていた生徒達に向かって言った。

「心配かけてごめんなさい。ネギをずっと支えてくれて、ありがとう。みんな——」  
深々とお辞儀をし、そして。

「as a genuin——」

呪文を唱えた。ネカネの身体から、白く眩い光が放たれる。あまりにも眩しく、ネギも生徒達も思わず目を覆った。それはまるで、タイムマシンが起動した時のようであった。長かったのか、それとも一瞬の事だったのか、いつしか光は治まり、抑えていた目を開くと——

「あ……え、嘘……!?!」

「これは、一体……」

「ネカネ、さん……?」

そこに居たのはネカネではなかった。否、同じローブを着ているし、背格好も一緒。だが、物静かに感じられた印象は、もっと強気そうな雰囲気を取って代わられている。何より、その髪の色は――

「アスナ、さん……?」

「ただいま、ネギ」

髪の色は、鮮やかなオレンジに変わっていた。まるで明日菜の髪のように。二つに束ねて鈴を付ければ、まったく見分けがつかないだろう。

「貴女は、一体……? ネカネさん、ネギ先生のお姉さんなんですの? それとも、貴女は……」

「アスナ、やの?」

「そんな、信じられない……」

喜んで良いものか、どうなのか。目の前に居るのは、どう見ても神楽坂明日菜にしか見えない。けれど式神の明日菜は確かに死んだのだから、彼女は本物の明日菜? でも本物の明日菜が自分から麻帆良学園に来るなんて、一体どうして?

「私は神楽坂明日菜だよ。みんな、ただいま!」

「ちょ、ちよっと、ただいまって！ あんた本当にアスナなの？ あの『アスナちゃん』の成長した姿だつて言うなら、ただいまじゃないでしょ、ここ初めての筈でしょ!!」

「良いんだよ、ただいままで。私は神楽坂明日菜でもあるし、ネカネ・スプリングフィールドでもあるし、それに麻帆良学園に居たもう一人の神楽坂明日菜でもあるからね」

そう言つて悪戯っぽく笑うネカネ——明日菜。ますます困惑の表情を深めるネギと生徒達に、明日菜は九年前に別れてからの事を語つて聞かせた。

「あんた達に助けられてから、私はアルビレオ——ナギや詠春の仲間——に連れられて、魔法使いの里に預けられたの。そこがネギの故郷だったわけ。私は記憶を封印され、ネカネ・スプリングフィールドとして、魔法使いの娘として、そこで暮らすことになったのよ。アーニヤちゃんや、生まれたばかりのネギのお姉さんとしてね」

生まれたときから一緒に居たお姉ちゃんが、アスナさんだった——なんと言う偶然か。いや、『ネカネ』を預けたのが父さんの仲間なのであれば、すべて知つての上でやったのだろう。過去と未来を見据えた上で、最善の方法を取る。父さん達は、やっぱり凄い人達なんだ……！

ネギがそう思っている頃、エヴァンジェリンはアルビレオの名を聞いて、頭を抱えていた。「記憶は無くしたけど、私は魔法使いとしての修行に励んだ。始めのうちはスタンさんが、魔力をきちんと抑えられるように。魔法学校に入学してからは、魔力をきちんと扱えるように。自分を守るため、他人を守るため——もう誰かが、私のために死んだりしないように。六年前

の事件の時は、村に帰るのが遅れたせいで、ネギしか守れなかったけど……あの後、ネギもそうだったけど、私ももつと勉強に励むようになってしまったわね」

勉強に励む。やはり、今日の前に居る明日菜は、今までの明日菜とは違うという事か……生徒達は、この時はそう思っていた。

「そして、『私』が死んだとき。一〇月二二日の真夜中——私にかけられていた封印が全部解けたんだ。そこには九年前までの、まだ私が『神楽坂明日菜』として生きていた時の記憶も含まれていた。私を助けるために、九年後の世界から来てくれたクラスメイトたちの事もね。だけど、それだけじゃなかった——もう一つ、別の記憶も私の中から湧き出してきたの」

そういつて明日菜は、右手を前に差し出し、開いた。そこには——

「鈴……」

「そう、これは、ネギが持ってきてくれた鈴。九年間『神楽坂明日菜』と共に在って、『明日菜』の人生を見届けた鈴。悪魔との契約を終えた後、これは二度目の九年間を、私の中で眠っていた。そして『明日菜』が死んだ時、鈴は二度目の役割も終えた——麻帆良学園で生きた『明日菜』の記憶を解放する、という形だね」

「……それじゃあ」

「うん。私はこの九年間、神楽坂明日菜とネカネ・スプリングフィールドの両方だったの。そして、本当の私は神楽坂明日菜。つまりこの九年間のメインは、ネカネではなく明日菜の方。」

ネカネの私が本物で、明日菜の私が偽者だ、なんて事ないよ。だから全部覚えてる。喧嘩もしたけど仲良くしてくれたいいんちよ。いつも優しいこのか。このかを心から大切に思っている利那さん。ネギの事が大好きな本屋ちゃんに、新体操で本当に楽しそうに跳ぶまきちゃん、何度も応援してくれた柿崎に円に桜子、修学旅行で助けてくれた龍宮さんに楓ちゃんにくーふえ……」

クラスメイト一人一人を挙げて、一言ずつ声をかけていく明日菜。違う人かと思っただけど、でも、これは本当にあの明日菜なんだ……声をかけられた生徒は皆そう思った。そして、それはクラス全員に広がっていった。

「そして……ネギ。私の先生。ガキで考えなしで迷惑ばかりかけられたけど、目標に向かってずっと走り続けてる、一生懸命で優しい子。そして……大切な弟だよ」

「……アスナさん……お姉ちゃん!!」

堪え切れず明日菜に抱き付いて、ネギは生徒の前にも関わらず大声で泣き出した。生徒達も泣いている。目を潤ませたり、口元を抑えたり、顔を背けたり。この時ばかりは、エヴァンジェリンも、千雨も、三十人全員が例外ではなかった。

## 16. Et tu Brute!

「ほんま、良かったなあアスナ……万事オーライ、終わり良ければ全て良し、やー」

「これからずっと日本に居られるの？」

「うん。イギリスの魔法学校の校長に話したら、ちゃんと手続き踏んで、麻帆良学園に行かせてくれるって。何か半分くらい知ってたみたい」

「そんな簡単だったなら、もっと早く来たって良かったのに。記憶戻ってもう十日でしょ、何やってたのさ?」

「いやー、それが、その……突然九年間の記憶が二人分になっちゃったから、頭がパニックっちゃって。記憶の整理するだけで一週間近くかかっちゃったのよ」

「……やっぱバカレッドアルよー! アスナはこうでなくちゃおかしいアルよー!!」

「ちよつとくーふえー! いくらなんでもその言い方はないでしょー!」

「バカレッド復活アルー! バカレンジャーは永遠に五人組アルー!!」

「……よつぽど、アスナが天才だと聞かされた事が、ショックだったみたいね……」

大喜びしている菲を見て明日菜は、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「ふふん。——When I first came to this school... I was still very young and I was taken care of by



Takahata-sensei for a while... you see, I had nobody to depend on.]

「う……」「お……」「わ……」

軽く演技の入った身振りまで付けて、明日菜は英語で語る。

「And this head ornament... was given to me from him back then. It was the first and the last present he gave me... I was just a kid then... maybe I did something wrong back then...」

「すげー、あんなスラスラと……」「流石だ……」「やっぱ天才なんだ……」

「だ、騙されちゃ駄目アルよみんな！ そいつはイギリス人だから英語が話せるだけで！」

幼い明日菜が天才だと聞かされた時より、見慣れた姿の明日菜が実際に流暢な英語を操っているのを見た今、一同は本当に呆然とする。狼狽した菲がいくら叫んでも、誰も聞いていない。

「『麻帆良の最強頭脳』にライバル出現ネ。アスナ、どうやら語学は得意のようだが、理数系はどうカナ？」

「自然科学も社会科学も魔法科学も、何だって相手するわよ。お料理で超包子に挑戦するのも良さそうよね。でも、今は私の事より——」

鈴音を軽くあしらった明日菜は、ネギを引つ張って、のどかのところへ連れて行った。

「本屋ちゃん。これからはネギの事、宜しくね」

「え……アスナさん……それって……」

「私は、自分自身が魔法使いだから、もうミニステル・マギ従者としてじゃなくて、最初からネギの隣に立て

るの。——さっきの話、聞いてたよ。だから私の代わりじゃなくて、本当に本屋ちゃんにネギのパートナーになって欲しいんだ。勿論無理にとは言わないけど」

「私……私は……」

「ネギ、あんたはどうなの？ 本屋ちゃんじゃ嫌？」

「いえ、そんな事は……だけど……」

その時、脇からのどかに近付いた夕映が、のどかの足を軽く引つ掛けた。バランスを崩したのどかは前に向かって転倒し——そこに立っていたネギと唇でぶつかった。

「よっしや、<sup>バフテイイ</sup>仮契約——！！」

何時の間に書き上げたのか、魔法陣を準備していたカモミールが雄叫びを上げる。

「ちょ、ちよつとカモ君!?」

「ね、ねねねネギ先生と、キキキキス——!?」(きゆう)

「わーっのどかさん！ 大丈夫ですか!?」

「なっ、何をしてらっしやいますのどかさん！ 抜け駆けは許しませんことよ!?」

「ずるいよ本屋ちゃん！ 私も！」

「……呆れた。あんたら、仮契約にしてもキスにしても、簡単に考えすぎでない？」

慌てて詰め寄る面々に、呆れ返る明日菜。しかしもう普段通りに戻った生徒達は、相手が明日菜でも、明日菜だからこそ、容赦しない。

「ずっと前からネギ坊主の唇を独占していたアスナに言われたくないアル！」

「独占!? な、何勘違いしてんのよ！ 第一今のあたしにとってこいつは弟なんだから！」

「だったら口出し無用アルー！」

「ウチも、ええかな？」

「み、皆さん、わ、私……」（オロオロ）

「アーティファクトつての、興味あるしねえ」

「ネギ君、お姉さんと一緒に大人の世界に旅立たない？」

「あ、あのっ、私も……」

「駄目です。ここは通さなさいです」

明日菜を放り出して再度殺到した一同を、夕映が遮った。

「もしネギ先生のパートナーになりたいのでしたら、さっきのどかに匹敵するだけの決意をここで述べるです。本気でそこまで考えられる人だけが、のどかと一緒にネギ先生の隣に並ぶ事ができるです。——私にも、そんなの無理です——」

貴女は凄い人です、のどか。敵わないです——

——\*——

「良いクラスになったのう、二年A組は」

「学園長。貴方は知ってたんですか？ ネカネ君がアスナ君だと」

「知らなんだよ。来ると聞かされるまではな。——六年前の事件の時、ネギ君とネカネちゃんだけが生き残ったと聞いて、スタン殿に話が聞けなかったと悔やんだんじゃが……ネカネちゃんもそうだったとは、まったく考えなかった。まんまと一杯食わされたよ」

「——流石、あの人達ですね。最高の作戦を、悪戯の中で仕掛けるという……」

「辞職届は、もう要らん」

ネギの辞職届を、学園長は破り捨てた。

## 17. Vive hodie.

麻帆良学園は、もうじき始まる学園祭「麻帆良祭」の準備で大賑わいになっていた。小・中・高・大まで全学園合同で、敷地の全てを使って行われる、想像を絶するほどの大規模なイベント。特に大学のサークルは、部費のほとんどを学園祭で稼ぐとも言われ、生半可な企業や商業イベントでは太刀打ちが出来ないほどのレベルだという。かつて騒ぎに歯止めが効かなくなって、一万人もの死者を出したことがあるとか無いとか——これは多分嘘。

中等部二年A組も、クラスの出し物の準備が始まっていた。生活指導員の目を盗んで、連日深夜まで残ったの作業。このままじゃそろそろ徹夜の覚悟が必要だ、最初からそのつもりだったんじゃないの、などとまことしやかに囁かれていた——これは多分本当。

明日菜も木乃香も、毎日作業に追われていた。天才であつても天然であつても、規模とスケジュールの無理には勝てない。それにネギも。教師でありながら。だから昨夜も午前様、睡眠不足でまた遅刻ぎりぎりである。

「ネギ君遅いでー、遅刻してまうよー」

「待ってよこのかさん、お姉ちゃん！」

「こらネギ！ 学校では明日菜って呼びなさいってば!!」

## 魔法先生ネギま！ アニメ版アナザー最終話

2005年 12月 29日 初版第1刷発行

2017年 1月 28日 第四版第1刷発行

**原案** シオン=ソルト **twitter** @ShionSolt

**著** 水野夢絵 **サークル** CCSF <http://ccsf.jp/>

**印刷所** PICO プリンティングイン株式会社